

障害時学童クラブおもちゃばこ 21年度活動

①放課後活動（主に和歌山市ふれあいセンター中心）

「料理クラブ」 開催回数 19回

「絵画工作クラブ」開催回数 22回

「スポーツ活動」山登り、ボール運動、リトミック、水泳 合計10回

「郊外活動」買い物体験、地域活動への参加 合計10回

②長期休暇活動（支援学校、和歌山県子ども障害者センターなど）

「デイキャンプ」ふれあいセンター、児童女性会館などで開催

「社会見学」岸和田博物館見学、関西空港見学

「夏祭り」子ども障害者センターにて実施

「郊外活動」バスに乗って和歌浦天満宮参拝、阪堺電車体験など

障がいのある子どもたちが集い、活動できる場所として定着させることが出来た。活動を通じて、他の学校の児童生徒同士が知り合うきっかけとなり、よい交友関係が生まれていった。

特に料理教室では、1つの物をグループで作ることで、仲間意識も育ち、また、小学生、中・高校生と縦割りのグループを作ることで、中・高校生が小学生を助ける場面も多く見られ、「年長者としての自覚と自信」を育むことが出来た。

描いた絵や、工作、手工芸で作った物を、学校に持って行き先生に自慢したり、また、家族の人にも作り方を説明したりと、ただ作るだけではなく絵を通じて様々な交流を持てるようになった。

教室で作ったことをきっかけに、それぞれが家でより高度な物を作るようになったりと趣味嗜好の広がりを持たせたと保護者にも好評であった。

また、郊外活動などの際、電車の乗り方、バスの乗り方、公共の施設でのマナーなどを学び、多くの社会体験を経験することで、社会の一員としての自覚と社会の規律を知ることが出来た。

活動全体を通じて、集団で様々な体験をする中で、集団を意識して、自己を抑制しその場にいることが出来る力が備わっていったと思われる。

また、活動には、指導員の他にボランティアが参加があり、障がいのある子どもたちへの支援ははじめてというボランティアも多いため、具体的に子どもへの支援方法を伝えられるよう、保護者からの子どもの状況を聞き取り、問題行動への対策、また、活動中に予想される状況を考えておく事により、よりスムーズに子どもたちへの支援をする事が出来た。

活動の工夫点

○支援者に解りやすい「サポートシート」づくり

活動には、指導員の他にボランティアが参加することも多い。障がいのある子どもたちへの支援ははじめてというボランティアも多いため、具体的に子どもへの支援方法を伝えられるよう、保護者からの子どもの状況を聞き取り、問題行動への対策、また、活動中に予想される状況を考えておく事により、よりスムーズに子どもたちへの支援をする事が出来た。

<提出してもらったサポートデータ>

サポートデータ			
名前		学校名	
保護者名		学年	
住所		緊急連絡先	
電話番号		保護者携帯	
FAX			
※障害について			
	・療育手帳	有り・なし	(A 1, 2, B 1, 2)
	・身体障害者手帳	有り・なし	級
	・障害名		
	・障害の状況		
※生活習慣について			
	・排泄	(全介助・半介助・介助なし)	
	・着替え	(全介助・半介助・介助なし)	
	・食事	(全介助・半介助・介助なし)	
	・好きな食べ物		
	・嫌いな食べ物		
	・気を付けて欲しい点		
	・好きな遊び		
	・苦手な遊び		

○活動の工夫

料理教室

短時間で仕上がるよう省ける工程を思案したり、また、子どもでも出来るように作り方に工夫した。

視覚的に解りやすいように行程を写真に撮り、オリジナルのレシピを作成した。



<ピザ作り>

絵画教室

季節の花や果物を用意し、絵の具は赤、青、黄色、黒、白の五色のみを使用した。

色をよく観察し、自分で想像しながら色を作っていく工程も子どもたちには楽しかったようだ。

出来上がった作品は、みんなの前で発表したり、文化祭などで発表の機会を得る事が出来た。



<ひまわりの描画>

工作教室

父の日のプレゼントに革紐の携帯ストラップを作ったり、クリスマスや七夕など行事ごとの工作の際は、みんなで一緒に作品を作り、子どもたち同士の交流を深めることが出来た。草木染めなど、変化を楽しめる教室が人気が高かった。



<タマネギの皮染め>

その他

電車に乗っての郊外学習では、行き先を楽しむだけではなく、切符の買い方、電車の乗り方、車内の過ごし方など、公共の場所でのマナーを体験し身に付けていくことが出来た。車内では駅名を記載したカードに停車する毎にシールを貼るなどをして、目的地までを見通しを持って静かに過ごすことが出来た。



<朝の会での活動の発表の様子>

○活動の中での子どもの成長

①S君の成長(年下の子どもと関わる中で目覚めた「年長者」の自覚と自信。

S君は料理教室5年目のベテランの中学1年生。

参加当初は、やりたい気持ちが強く、何でも「自分がする。」と独り占めしてしまう事が多く、調理器具の取り合いになる場面もありました。反面、後片付けなど、したくないことは積極的に動くことはしませんでした。

また、野菜が苦手で、レシピの中の野菜は必ず取り除いて作り、口にすることは出来ませんでした。

今年は、中学部に入学したという事もあり、年長者としての自覚が芽生え、やりたい気持ちを我慢して、年下の子どもに譲ったり、また、出来ない事を手伝ってあげる中で「頼られる」喜びも覚えていったようでした。年下の子どもの手本となるように「後片付け」も自分できちんと出来るようになりました。

また、同じく「野菜が食べれない」年少者の参加により、「小さい子と同じでは恥ずかしい」という思いからか、野菜も食べるようになりました。

②Yさんの成長(活動を通じて、指導員との関わりの中で見せた言葉の成長

Yさんがはじめて来た日、お母さんはこういいました。「小学生の頃は話も出来る子でした。今も話している意味はわかると思います。文章などで書くことは出来ます。」ずっと、下を向いて視線を合わせようとしないYさん。「料理はとても好きなんです。」お母さんの言葉に僅かに頷いただけで、話しかけると固まってしまう。Yさんはそんな女の子でした。

料理が好き、という言葉通り、活動自体はとても好きなようでした。また、手先がとても器用であったため、包丁を使ったりすることも少し教えると難なくこなすようになり、次第に料理のグループの中心的な役割をこなすようになりました。

「・・・次、なにをするの？」

少しずつ、自分から会話をしてくるようになったYちゃん。友達からもずっと逃げていたけれど、次第にみんなの中で過ごせるようになっていきました。

料理を作ること、みんなから賞賛を浴びることで少しずつ自信が出てきたのでしょうか。活動の前には電話をかけてきて「次、何作るの？」と聞いたり、また、おもちゃばこでの活動を家で伝えたり、学校で発表したりするようになりました。

③Yくんの成長(先を見通し物を作り上げる。また、その場にいることが出来る力

Yくんは自閉症で知的障がいを伴っています。

集団が苦手で、自分の嫌いな場所から逃げてしまったり、また、みんなと活動を共にする

ことが出来ず、すぐに活動の部屋から逃亡してしまっていました。

工作をする事には興味があり、手先も器用なので作業は上手でしたが、活動に見通しが持てなかったり上手に出来ないとすぐにパニックになってしまっていました。

必ず出来上がりのものを用意して見せること。作業工程を幾つかにくぎり、図に表した物を用意し、作業自体を解りやすくすること。また、席を指導員の前にし、作業の手元をよく見えるようにすることで、うまく作業が出来るようになり、思い通りのものが作れることに段々喜びを感じるようになりました。

また、作った物を褒められたり、みんなの手本となったりすることで、次第にみんなのなかにいることが出来るようにもなりました。

○ボランティアの声

・学校で勉強していましたが、はじめのうちは、子どもとどのように接すればいいのかわからず不安でいっぱいでした。でも時間がたつにつれ、楽しく接することが出来ました。また、機会があれば参加したいです。

・初めて参加させていただきました。我が子も6歳、10歳と同じような年齢の子どもがいますので、ダブって見えました。若い方がたくさんボランティアで参加されているのに驚きました。これからの彼らの活躍に期待が出来、日本もまだまだ捨てたもんじゃないな、と思いました。